

ジャーナル駆動型リサーチの誕生

選択的資源配分を前提とする研究評価事業の意図せざる結果

同志社大学 佐藤郁哉

1. 目的

学術研究をめぐる世界レベルの競争の激化と財政危機等を背景として、各国で国家全体での研究評価とそれにもとづく公的研究資金の配分方法の見直しが進められている。それら一連の動向をめぐる議論においては、研究予算の重点配分と大学間の明確な機能分化の必要性が強調される一方で、過度の傾斜配分が学術研究の裾野を掘り崩し全体的な地盤沈下をもたらす懸念が指摘されている。本研究の主たる目的は、この問題について、1980年代に開始され最も先進的な事例として知られる英国の研究制度を事例としてとりあげ、研究評価とそれにもとづく選択的資源配分が研究活動に及ぼしてきた各種の影響、とりわけその「意図せざる結果」について明らかにしていくことにある。

2. 方法

本研究では、主として以下の3種類のデータソースを用いた—①国家規模の研究評価に際して英国の各大学から提出された研究業績のデータベース、②文献資料—財政審議会の公開資料、報道資料、議会議事録等のアーカイブ資料等、③英国の大学および助成機関の関係者に対するインタビュー。①については、英国高等教育財政審議会（HEFCE）が管理するウェブサイトで公開されているデータベースだけでなく、HEFCEのご厚意によって入手することが出来た公開終了後のデータを加えて、計量書誌学的分析をおこなった。②に関しては、発表者が2013年に6ヶ月英国に滞在していた際に収集したアーカイブ資料が貴重な情報源となった。また、現地滞在中およびその後今日にいたるまで英国の大学及び助成機関の関係者のべおよそ30名に対してインタビューをおこなうことが出来た。

3. 結果・結論

英国の研究評価事業については、さまざまな立場からの論評や評価がなされてきた。その毀誉褒貶相半ばする「評価についての評価」は、次の3つに区分できる—①公的研究資金に関する説明責任、②研究戦略と実績主義、③学術研究の幅と質。これらの中でも、ここで最も注目に値するのは③、すなわち研究評価制度が高等教育機関でおこなわれる学術研究の内容や質に対して与える影響である。というのも、本来研究水準の維持・向上を目的としておこなわれてきた研究評価が、時としてその逆の影響を及ぼしてきたとされる場合が珍しくないからである。この点に関して特筆すべきは、「ジャーナル駆動型リサーチ（journal-driven research）」とでも呼ぶべき風潮である。すなわち、発表媒体としての学術誌の特徴、特に学術誌の格付けの高さを最優先事項とするような研究姿勢が見られるケースが稀ではないのである。これは、学術的好奇心にもとづく研究（curiosity-driven research）ないし社会的意義を第一に考えておこなわれる研究（socially driven research）とは極めて対照的なスタンスであると言える。当然ではあるが、研究評価のみがジャーナル駆動型リサーチの「元凶」と言うわけではない。しかし、大学評価ないしそれと密接に関係している大学ランキング等がそのような狭量な業績主義の重要な背景にあることは否定できないだろう。また、研究評価をめぐって英国で見られてきた状況は、日本における大学評価や公的研究資金の傾斜配分政策について考えていく上でも多くの示唆を含むものだと言えるだろう。

付記：本研究は、JSPS 科研費（基盤研究（B）：課題番号 15H03407）の助成を受けたものである。